

6課

11月8日

内なる敵



安息日午後 11月1日

暗唱聖句

心を探り、そのはらわたを究めるのは／主なるわたしである。それぞれの道、業の結ぶ実に従って報いる。(エレミヤ 17:10、新共同訳)

主であるわたしは心を探り、思いを試みる。おのおのに、その道にしたがい、その行いの実によって報いをするためである。(エレミヤ 17:10、口語訳)

今週の聖句

Ⅰペトロ 1:4、ヨシュア記 7章、詩編 139:1～16、エズラ記 10:11、ルカ 12:15、ヨシュア記 8:1～29

今週のテーマ

ヨシュア記7章は、イスラエルの民が悲劇的な経験を通して、契約の広範囲に及ぶ結果とその深い意味を学んだ最初の例です。契約の規定に従えば勝利が約束される一方で、契約の条件を無視すれば敗北がもたらされました。イスラエルの軍事的成功は、彼らの数、戦略、巧みな戦術にかかっていたのではなく、彼らと共におられる神の戦士の存在にかかっていたのです。

約束の地の占領を行っている間、イスラエルは、最も危険な敵は彼らの陣営の外にではなく、彼らの兵士の中にいるという苦い教訓を学ばねばなりませんでした。彼らの前に立ちはだかった最大の難題は、カナン人の町の要塞化された壁でも、カナン人の高度な軍事技術でもなく、自分たちの陣営の中で、主の命令を故意に無視しようとする個人のかたくなな意志だったのです。

天国の相続財産(Ⅰペト1:4、コロ3:24)を待ち望んでいる私たちも、同じような難題に直面します。約束の地の国境にいる間、私たちの忠実さは試され、イエス・キリストに身を委ねることによってのみ勝利することができるのです。

問1 ヨシュア記7章を読んでください。イスラエルがアイの住民に敗北した二つのおもな原因は何でしたか。

興味深いのは、読者が最初からヤハウエの怒りの理由と犯人の名前を知っていることです。このように、アカンを暴く物語のハラハラする感じは、読者の視点と、ヨシュアとイスラエルの人々の視点の間の緊張によってもたらされます。旧約聖書のほかの多くの章と同様、ヨシュア記7章は交差配列構造になっており、その中心となる山場の部分は、イスラエルの人々が最初の出撃でアイを征服できなかった理由についての疑問に答えています。

イスラエルがアイの住民に敗北したおもな理由は、二つありました。アカンの罪と、自分たちの力に対するイスラエルの人々の過信です。後者のゆえに、彼らはアイへの攻撃の前に主の御旨を尋ねることを怠り、敵の力を過小評価してしまいました。

ヨシュア記7:1、11～13を読むと、禁令を破るという不誠実な行為の責任はアカンにありましたが、民全体が彼の行為の責任を負わされ、苦しんでいたことがわかります。神は、11節で「さらに」または「……もまた」を意味する副詞（ヘブライ語「ガム」）を重ねて用いることで、その罪の重大さを徐々に示しながらアカンの罪を説明しておられます。まず、罪をあらわす最も一般的な言葉である「ハター」が用いられ、次に、副詞「ガム」で始まるもっと具体的な五つの罪によって、その違反行為は説明されているのです。(1) さらに「違反し（踏み越え）」（「アヴァル」）、(2) さらに減らし尽くしてささげるべきもの（「ヘレム」）から「取り」（「ラカッハ」）、(3) さらに盗み（「ガナヴ」）、(4) さらに「ごまかして」（「カハシュ」）、(5) さらに盗んだ「ヘレム」を自分の持ち物の中に「入れた」（「スィム」）。

ヤハウエとイスラエルの間での契約は、個人と集団の両レベルで人々に関係していました。契約に照らせば、イスラエルは神に選ばれた民の不可分な統一体として扱われます。したがって、その構成員の1人、あるいは数人の罪は、契約共同体全体に罪を負わせることになります。主が言われたように、「イスラエル（単数）は罪を犯し、（彼らは）わたしが命じた契約を破（った）」（ヨシュ7:11）のです。

共同体内の個人の悪い行いによって、共同体全体がどんな形で苦しむ可能性があるでしょうか。また、実際にどのように苦しんできたでしょうか。どんな例が思い浮かびますか。共同体は、いかに影響を受けましたか。

問2 ヨシュア記7：16～19を読んでください。この手順全体から、神とアカンについて、どんなことがわかりますか。

神は、罪を犯した者の正体を明かす代わりに、ご自分の正義と恵みの両方を明らかにする手順を設けられました。神は、イスラエルの敗北の理由を説明し、人々の清めを求めたあと（ヨシュ7：13）、その手順を告げてから実行するまでの間に時間を設け、アカンに対して、考え、悔い改め、罪を告白する機会を与えられたのです。同様に、（もし事情を知っていたなら）アカンの家族にも、隠蔽（いんぺい）に加担するか、父親の側に立つことを拒否することで破滅を免れたコラの息子たちのように、共犯者になるのを拒むかを決める機会を与えられました（民16：23～33、26：11と比較）。

この苦境に対する解決策は、罪がイスラエルに入り込み、イスラエルを苦しめた過程とは逆の方向をたどります。つまり、集団の罪がまず取り除かれ、イスラエルから一つの部族へ、部族から氏族へ、氏族から家族へ、そして家族から個人へと絞り込まれるのです。この調査の過程は、犯罪者だけでなく、無実の者も明らかにしました。これは、神自身がアカンの隠された行為の証人になれるという、綿密な司法手続きの重要な側面でもありました。

神がアカンに狙いを定められるにつれ、読者は緊張を感じるような気がします。見つからずに済むことを願ったアカンの頑固さに、驚かない人がいるでしょうか。主の鋭い目から逃れることができるものは何もありません（詩編139：1～16、代下16：9）。人の心の中に隠されていることを、主はご存じなのです（サム上16：7、エレ17：10、箴言5：21）。

ヨシュアがアカンに、「わたしの子よ」と呼びかけている点に注目することは重要です。この表現は、ヨシュアの年齢と指導者としての役割を示しているだけでなく、この偉大な戦士が正義に対処する精神も明らかにしています。彼は、犯罪者に対して裁きを執行するよう命じられていたにもかかわらず、その心は、アカンに対する憐れみに満ちていました。ヨシュアは、その態度を通して、神の感受性、優しさ、愛を、再び予示していたのです。「主は、決して不作法だったり、不必要に厳しい言葉を出したり、感じやすい魂に不必要な苦痛を与えたりなどされなかった。……イエスは、偽善、不信、不義を恐れることなく攻撃されたが、激しい譴責の言葉を出されるときには、その声に涙があった」（『希望への光』851ページ、『各時代の希望』第37章）。

神がすべてをご存じであるという認識は、あなたにどんな影響を与えますか。

問3 ヨシュア記7：19～21を読んでもください。ヨシュアはアカンに、どうするように求めていますか。このような要求の意味は何ですか。私たちは彼の告白を、いかに理解したらよいのでしょうか。

ヨシュアはアカンに、二つのことをするように求めます。第一に、神に栄光を帰し、神を敬うこと。第二に、彼が行ったことを隠さずに告白することです。アカンは、自分が行ったことを認めることで、神に栄光を帰すべきでした。ここで用いられているヘブライ語（「トダー」）は、「感謝」（詩編26：7、イザ51：3、エレ17：26）を指すこともあれば、「罪の告白」（エズ10：11）を指すこともあります。

残念ながら、聖書には、アカンが心から悔い改めたという兆候が認められません。最後まで、彼は隠したままであることを望んだのです。その反抗的な態度は、モーセの律法によれば、彼を容赦しがたい横暴な犯罪者と見なす要件を満たしていました（民15：27～31と比較）。

ヨシュア記7：21のアカンの言葉は、アダムとエバの墮罪を思い起こさせます。エバは、その木が望ましい（「ハマード」）のを見て（「ラー」）、最終的にその実を取りました（「ラカハ」）（創3：6）。アカンは告白の中で、略奪品の中に美しいシンアルの上着、銀200シェケル、金の延べ板を見た（「ラー」）ことを認めています。そして、それらが欲しくなって（「ハマード」）、取った（「ラカハ」）のです。アダムとエバの場合とまったく同じように、アカンの選択は、貪欲の罪が不信仰の罪であることを明らかにしています。貪欲の罪は、神が被造物に最善のものを与えようと望んでおらず、ご自分の領域にのみ属する最高の喜びを被造物から隠しておられるのではないかと疑わせるのです。

この聖句は、原初の人間の墮罪をほのめかしているだけでなく、ラハブの態度（ヨシュ2：1～13と比較）とアカンの態度の違いを明確に際立たせています。一方は、斥候を屋上に連れて行って「追手の」兵士たちから隠し、もう一方は、禁じられたものを取って、ヨシュアから隠しました。一方は、イスラエルの斥候に好意を示し、勝利を確実にする手助けをし、もう一方は、貪欲によってイスラエルに迷惑をかけ、敗北を確実にものとししました。一方は、イスラエルの人々と契約を結び、もう一方は、ヤハウエとの契約を破りました。ラハブは自分と家族を救い、彼らはイスラエルで尊敬される市民となり、アカンは自分と家族を死に至らしめ、不名誉の一例となりました。

貪欲の罪に陥らないためにはどうすればよいでしょうか（ルカ12：15と比較）。

問4 ヨシュア記8:1～29を読んでください。この物語は、神がいかにして私たちの大失敗をチャンスに変えることができるかについて、どんなことを教えていますか。

ヤハウエの戦略は、イスラエルの最初の敗北を戦術的優位に変え、アコルの谷（ヘブライ語で「苦悩」）を希望の門に変えました（ホセ2:17〔口語訳2:15〕と比較）。イスラエルの人々に対する最初の勝利で自信過剰になったアイの住民は、撤退と敗北を装うイスラエル人に対し、同じ戦略を繰り返して攻撃します。ひとたびアイの住民が要塞から誘い出されると、町からあまり離れていないところに陣取っていた3万人のイスラエルの人々は（ヨシュ8:4）、空っぽの町を占領して、火を放ちます。ヨシュア記8:7は、勝利をもたらすのは戦略でなく、勝利を与え、アイの町をイスラエルの人々に引き渡される主ご自身であることを明らかにしています。8章は、この書のほかのどの章よりも軍事的側面が物語の中心を占めていますが、この聖句は、勝利がヤハウエの賜物であるという根本的な真理を強調しているのです。

戦いの決定的瞬間は、アイの人々が町を出て、イスラエルの人々を追跡し始めたときに起こります。それは、ヨシュア記8:2で神が戦略を授けられたあと、この章全体で語られる二度目の場面であり、神が戦いを指揮していることを示しています。この時まで、戦いの結果は明らかではありません。しかし、ここから先は、イスラエル軍の勝利が明確になります。

ヨシュアの手握られていた武器は、通常の剣ではなく、鎌状の剣、つまり三日月刀でした。当時、鎌状の剣は実際の武器として使われていなかったかもしれませんが、主権の象徴になっていました。ですから、それは攻撃の合図を送るだけでなく、アイの敗北における神の主権をあらわしていました。完全な勝利が得られるまで鎌剣を差し伸べることで、ヨシュアは、葦の海の横断（出14:16）や、彼が自ら戦闘を指揮したアマレク人との戦争（同17:11～13）においてモーセが果たした指導者としての役割を、完全に引き継いだことが示されているのです。

今回は、目に見える奇跡的な神の介入はありませんが、アイに対する勝利は、第一世代のエジプト人に対する勝利や、直近のエリコに対する勝利に劣らず、神の助けによるものでした。成功の鍵は、ヨシュアが主の言葉を信じ、それに揺るぎなく従ったことにあります。この物語に見られる原則は、今日の神の民にとっても、たとえどこに住んでいようと、どんな困難に直面していても、当てはまります。

すでに学んだように（5課参照）、神は異教の民に、ご自分について知り、悪の道から離れる機会を与えられました。しかし、彼らはそれを拒み、最終的に神の裁きを受けることになりました。

問5 ヨシュア記7：6～9を読んでください。そこには、イスラエルの民に降りかかった災難に対するヨシュアの最初の反応が書かれています。特にヨシュア記7：9に注目してください。彼の言葉には、どんな重要な神学的原則が見られますか。

最初、ヨシュアの言葉は、エジプトを出たあとの苦難の中で、イスラエルの子らが口にした言葉のように聞こえます。例えば、「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている」（出16：3）。

ここでヨシュアは、こう言っています。「ああ、わが神、主よ。なぜ、あなたはこの民にヨルダン川を渡らせたのですか。わたしたちをアモリ人の手に渡して滅ぼすおつもりだったのですか。わたしたちはヨルダン川の向こうにとどまることで満足していたのです」（ヨシュ7：7）。

しかしその直後、彼はこの敗北によって神の御名と評判が傷つくことに大きな懸念を示しています。「カナン人やこの土地の住民は、このことを聞いたなら、わたしたちを攻め囲んで皆殺しにし、わたしたちの名を地から断ってしまうでしょう。あなたは、御自分の偉大な御名のゆえに、何をしてくださるのですか」（ヨシュ7：9）。

この言葉は、イスラエルに対する神の目的の中心となる主題と原則を明らかにしています。神は、イスラエルの周囲にいる異教の民に、ご自身が神に従う民のためにどれほど偉大なことを行うかを見てほしいと望まれましたが、ラハブのように、彼らもまた、神の民の征服の力によってイスラエルの神について学ぶこともできました。一方で、ここでのように物事がうまくいかなかった場合、異教の民は、イスラエルの神が弱く、無力であると見なし（民14：16、申9：28参照）、カナン人の抵抗を強めることにもなりかねませんでした。

言い換えれば、ヘブライ人が土地を占領するという状況においても、大きな問題と原則が関係しており、そこには異教徒にとってもイスラエルにとっても唯一の希望であられる神に誉れと栄光を帰すことが含まれていたのです。

参考資料として、『人類のあけぼの』第45章「エリコの陥落」の後半部分(255～258ページ)を読んでください。

「アカンを死に至らせた恐ろしい罪の根は貪欲であった。これは、すべての罪の中で最も一般的なもので、最も軽視されている。……アカンは罪を告白したけれども、時はすでに遅く、彼には何の役にも立たなかった。彼は、イスラエルの軍勢がアイで敗北し、失望したのを見た。しかし、彼は進み出て罪を告白しなかった。彼は、ヨシュアとイスラエルの長老たちが、言葉で表現できない大きな悲しみのうちに、地にひれ伏したのを見た。もし彼がその時に告白していたならば、それは、真の悔い改めの証拠となったことであろう。しかし、彼は、まだ黙したままであった。彼は、大きな犯罪が行われたこと、そして、その罪の性質さえもはっきり宣言されたのを聞いた。しかし、彼は唇を閉じていた。それから厳粛な調査が始まった。彼の部族、氏族、そして家族が指摘されたとき、彼の心は、恐怖に震えたことであろう。それでも彼は告白しなかった。ついに、神の指が彼を指さすに至った。こうして、彼は、罪をこれ以上隠すことができなくなって事実を認めた。同様の告白が、なんと多くなされていることであろう。事実が証明されたあとで、それを認めることと、神とわれわれだけに知られた罪を告白するのとは、非常な相違がある。アカンは、告白することによって、犯罪の罰を逃れようとする気がなかったならば、告白はしなかったことであろう。しかし、彼の告白は、その刑罰の正当なことを示したにすぎなかった。彼は、罪に対する真の悔い改めも、悔悟も、目的の変更も、悪に対する憎しみも感じていなかった」(『希望への光』257、258ページ、『人類のあけぼの』第45章)。

話し合いのための質問

- ① 広告と大量消費主義の世界において、十戒の第十条(出20:17)の意味について話し合ってください。どうすれば、欲しいものと必要なものを実際に区別することができるでしょうか。また、その区別はなぜ重要なのですか。
- ② ダニエル9:4～19のダニエルの祈りを読んでください。ダニエル自身が悪事を働いたという記録がないにもかかわらず、彼がイスラエルの罪を告白する際、「わたしたち」がと繰り返したことは、なぜ重要なのですか。
- ③ イスラエルの人々があらゆる^{おきて}掟と戒めに従うことは、彼らの証しにとって、なぜ重要だったのでしょうか。この原則は、今日の私たちの教会にいかに当てはまりますか。私たちが神から与えられたあらゆることに実際に従うなら、私たちの証しは、どれほど効果的なものになるでしょうか。